

# ケインズ理論における消費関数の役割とその問題点

集計的消費関数は、ケインズの乗数の理論の基本前提であるが、消費支出は当期の可処分所得のみの関数であるという仮定には疑問もある。

## I. 45°線の理論と乗数理論の基礎

### A. 均衡国民所得の決定

$$C = a + c(Y - T)$$

$$Y = C + I + G$$

$$Y^* = \frac{1}{1-c}(I + G - cT)$$

### B. 消費関数 1990年価格, 兆円単位 1968SNA 日本, 1990:I-1999:I

$$C = \underset{(10.70)}{15.2} + \underset{(35.37)}{0.663} Y$$

括弧内は  $t$  値

## II. 消費関数の問題点

### A. 統計上の問題

1. クズネッツの発見：国民所得と家計消費支出の長期にわたる趨勢
  - a. 1人当り国民所得の成長
  - b. 平均消費性向の値の安定

10年間移動平均に見られる平均消費性向の趨勢

アメリカ合衆国, 1869-1938

	国民所得 (10億ドル)	消費支出 (10億ドル)	平均消費性向	1人当り 国民所得
1869/78	9.3	8.1	0.86	215
1874/83	13.6	11.6	0.86	278
1879/88	17.9	15.3	0.85	326
1884/93	21.0	17.7	0.84	344
1889/98	24.2	20.2	0.84	357
1894/03	29.8	25.4	0.85	401
1899/08	37.3	32.3	0.86	458
1904/13	45.0	39.1	0.87	502
1909/18	50.6	44.0	0.87	517
1914/23	57.3	50.7	0.89	546
1919/28	69.0	62.0	0.89	612
1924/33	73.3	68.9	0.94	607
1929/38	72.0	71.0	0.99	572

Kuznets (1946)

## 日本，家計部門，1955–1999

	可処分所得 (兆円)	消費支出 (兆円)	平均消費性向	1人当り可処分所得 (千円)
1955/64	11.3	9.7	0.86	123
1960/69	22.6	19.0	0.84	233
1965/74	47.7	38.8	0.81	468
1970/79	99.9	79.1	0.79	922
1975/84	162.3	132.0	0.81	1,417
1980/89	214.9	181.9	0.85	1,805
1985/94	272.7	235.9	0.86	2,229
1990/99	296.6	258.7	0.87	2,380

内閣府，経済社会総合研究所『国民経済計算』(68SNA)

総務省統計局『国勢調査』

## 2. 時系列分析の問題：見せ掛けの相関（無意味な相関）

- a. 所得の上昇トレンド
- b. 消費支出の上昇トレンド

## B. 理論上の問題

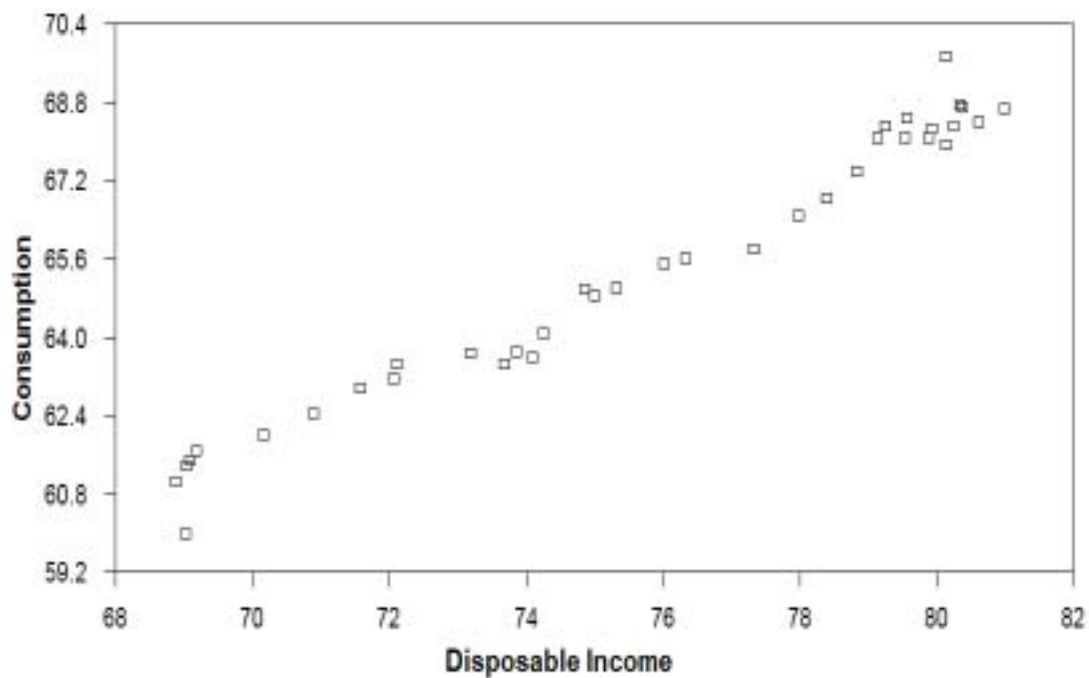
1. 将来の所得に関する予想
2. 所得分配の変化の影響

## 参考文献

Friedman, Milton (1957) *A Theory of Consumption Function*. Princeton, New Jearsey: Princeton University Press. Chapters I and II.

Kuznets, Simon (1946) *National Product Since 1869*. New York: Natonal Bureau of Economic Research.

1990年代日本の家計可処分所得と家計消費  
 (単位 1990年価格 兆円)



可処分所得と消費の趨勢

